



リバタリアン

月
刊

ホームページ
<https://institute-for-libertarian.org>
 メールアドレス
info@institute-for-libertarian.org

発行所 リバタリアン協会
 編集・発行人 前川範行

リバタリアン党の原爆言説

アメリカのリバタリアン党は2023年8月7日に、第二次世界大戦で広島・長崎に投下された原子爆弾の従来の言説を糾弾するツイートを行った。

<https://twitter.com/LPNational/status/1688336773028454400>

原爆投下に対して、「人命、特にアメリカ人の犠牲を減らすためにやむを得ず投下した」と居直る言説が存在する。功利主義によれば、それはそうなのかもしれない。犠牲者の数が減ることは、総効用の低下を緩和させるからだ。しかし、リバタリアンは純粋な功利主義者ではない。功利主義的なリバタリアン思想の正当化が存在したとしてもだ。

リバタリアン党の歴史認識として、①1945年5月時点で（例外条項はあるが）日本はアメリカに対して降伏の申し入れをしていたこと、②禁輸政策によって日本の石油は枯渇しており、1945年7月時点で日本海軍は主たる作戦を実行できず戦争継続が困難になっていたこと、③米軍の将軍の中には原爆の不使用を求めた者がいること、④原爆の使用目的はアメリカ人の命の救済よりも、ソ連に対する示威であったこと、⑤原爆投下は軍拡競争、軍産複合体の誕生、そして冷戦を引き起こしたことを挙げている。

上述の認識を踏まえ、リバタリアン党は、①原爆が何百万の人命を救い、原爆を投下しなければ日本が降伏しなかったこと、②原爆は道徳的に正当化されないことの以上2点を拒絶した。「これらは、アメリカ政府による明らかなテロリズムの行使による、市民の大量虐殺を正当化するための神話である。」また、最後にリバタリアン党は、二度と広島・長崎のような悲劇があってはならないと強調した。

リバタリアンは戦争に対して、核兵器に対して、どのような態度をとるのか。当然、反戦・版核兵器である。戦争は自己所有権の最も明示的な破壊行為であり、核兵器は多くの無辜の人々を傷つけるだけに留まらず、土地や文明を超長期の未来に渡って破壊してしまう。リバタリアンは、戦争と核兵器を直ちに止めなければならない。

「すべての戦争を終わらせるための戦争」は、より新しく、より悲惨な戦争の始まりでしかなかったと、衆目に晒された。すべての戦争を終わらせるためには、国家権力と徴税を廃止しなければならない。国家は不当にも暴力を独占するため、奔放に軍事力を行使可能だ。一部の人々はシビリアン・コントロールによって国家の暴力に対処しようと務めるが、そもそも、国家主導の民主制は一部の大資本家の手の上で踊らされているだけである。彼ら/彼女らは「公共の福祉」の名の下に個々人の自己所有権を破壊し、資本財と消費財を自らの懐に納めるのだ。徴税はこの破壊と収奪をより容易にするため

に行われる。質の悪いことに、税を奪われた人々（納税者）は、税を消費する階級（消費税）になろうと試みる。しかし、それこそがまさに大資本家/自己所有権の破壊者の目論見であり、人々を納税・消費税という階級に分け隔て、消費税に仕立て上げ、人々を自己所有権の破壊者に仕立て上げるのだ。

リバタリアンが直ちにできることは、戦争を止め、核兵器を廃絶することだ。

(友花優香)

8.6 ヒロシマ大行進

2023年8月6日、広島県広島市にて大規模なデモが行われた。このデモは以下のような事情がある。つまり、岸田首相率いる日本国政府は、1945年8月6日の原爆投下からの教訓と反省を活かすことなく、核抑止論に迎合している。そのような行いは、戦死者・負傷者・被爆者・その知人や家族らの思いを踏みにじると同時に、新たな犠牲者を生み出す萌芽となるのだ。この着実に迫る国家の拡張と自己所有権の侵害に対抗するために、そして反戦反核のために、リバタリアン同盟はデモに身を投じたのだ。

なぜ、リバタリアンが活動に身を投じるのか、改めて確認をしよう。自己所有権に依拠するリバタリアンにとって、自己所有権の侵害は不正であり、従って、同意なき財の奪取や暴行は不正なのだ。また、国家による徴税は自己所有権の侵害であり、徴税によって得た財によって新たな暴力を独占し、行使することで更なる自己所有権の侵害を行っている。日本国政府の存在そのものはもちろん、軍備増大や増税は剥き出しの権利侵害なのだ。

では、リバタリアンはどのように、権利侵害を防ぐのか。様々な方法が考えられるだろう。研究とその成果の流布、SNS・ウェブを利用した広報、減税活動等が考えられる。これらはすべて行うべきものである。しかし、最も重大なものが足りていない。圧力である。教育活動のみでは限界がある。リバタリアンが説得を試みたところで、政府構成員と大資本家は応じない。彼ら/彼女らは国家的徴税と法規制によって市場への新規参入を阻害し、同意によらない財の占有を行う。我々の敵に対して行うべき手段は圧力の行使だ。話し合いによる解決は絶望的である。もし説得によって解決可能であったとしても、それは経済的・政治的な実力が対等なときだけだ。彼ら/彼女らは権利概念なき不正者であり、直接的な暴力と財の占有によって自らの存在と政治的・経済的実力を維持するのだ。

圧力の行使はリバタリアンにとって伝統的な方法である。アメリカ独立戦争、スペイン内戦、20世紀のスチューデント・パワー、ティーパーティー運動、ダーク・ウェブ、これらすべては説得によるものではない。圧力によるものである。リバタリアンは教育と説得を重

目次

- 1 リバタリアン党の原爆言説 (友花優香)
- 1 8.6 ヒロシマ大行進 (リバタリアン同盟)
- 2 解説：コンキンとのインタビュー (前川範行)
- 3 8/4 ウェビナー報告 (リバタリアン協会)
- 4 訳『新リバタリアン宣言』① (SEK3, 訳：前川範行)
- 8 熊野寮への不当な家宅捜索に抗議する (S.K.)

んじるが、最終的に敵に対しては圧力を講じるのが常であった。我々が何かをしないことには、リバタリアン社会へは到達しないのだ。それどころか、何もしなければますます彼ら/彼女らの思い通りに変容するのだ。

上述の事情から、我がリバタリアン同盟は抗議の為にデモを行ったのだ。

(リバタリアン同盟)

解説:コンキンとのインタビュー

「コンキンとのインタビュー Interview with Konkin」は、文字通りサミュエル・エドワード・コンキン3世とのインタビューであるが、リバタリアン思想において重要な価値がある。

「コンキンとのインタビュー」は、コンキンを相手に、_wlo:dek と michal がインタビュアーを務める。この_wlo:dek と michal なる人物、今のところ、どのような人々なのか知るに至っていない。皆様の情報提供をお待ちする次第である。インタビューは、ダニエル・バートン Daniel Burton によれば、2002年に行われたようだ。コンキンは2004年に56歳で亡くなるから、インタビュー時は54歳だ。マレー・ロスバードが1995年に亡くなり、ロバート・ノージックは2002年に亡くなっている。他にも20世紀中にロバート・ルフェーブやロバート・ハインラインらも亡くなっており、1960年代から顕著になるリバタリアン運動に従事した活動家たちがこの世から消え去り、その記憶も消し去られることに危惧があったのではないだろうか。リバタリアニズムの話ではないが、日本では近年、学生運動期に従事した活動家たちによる回顧録が流行りである。「懐古趣味」とか「時代錯誤」であると非難する人もいるだろうが、記憶を記録にする意義は大変大きい。現場で活動する人間であればともかく、現場から切り離された大多数の人々（将来生まれる人を含む）にとって参考できる資料は文字と映像ぐらいのものだからだ。

さて、「コンキンとのインタビュー」の構成は、まずインタビュアーによるコンキンの紹介から始まる。ここで重要なことは、①(アメリカの)リバタリアン運動は1969年から始まっていること、②コンキンにリバタリアン党員の経歴があることだろう。通常、1960年代の学生運動や反戦運動は1968年から始まる。しかし、(アメリカの)リバタリアンにとっては、1969年の共和党セントルイス大会こそがその狼煙である。日本でも、日本共産党から日本トロッキスト聯盟(後の革命的共産主義者同盟、中核派・革マル派)が生まれたように、既成政党の拒絶と新組織の確立がリバタリアンにもあったのだ。次に、コンキンにリバタリアン党員の経歴があること、つまり大文字のLの経歴があることについてだが、これは後年のコンキンを知る者からは意外なことに思われるかもしれない。というのも、コンキンは後に記す『新リバタリアン宣言 *New Libertarian Manifesto*』にて、明確に政党の存在とその支配を否定しているからだ。しかも、幹部会議に出席し、代議員として党員の信任を得ている。とはいえ、後の反・政党政的性向が自由リバタリアン党の大会でボイコットを敢行していることから、既に反・政党政の構想があったのだろう。余談だが、(コンキン曰く)ロスバードは中央集権主義的であり、コンキンは分権的だが、これは、レーニンのような党組織の確立を目指す者と、(レーニンの云うところの)経済主義者の対立そのものである。

インタビュアーの前書き後、本編が始まるが、「インタビュー」は、①必要不可欠な背景、②歴史から理論へ、③理論から実践へ、に分かれている。「必要不可欠な背景」は、まずリバタリアンの定義から始まる。ここでコンキンはリバタリアンを、ミナキストを含む「自由市場アナキスト」の別用語と定義している。基本的には、現代でいうところソフト・リバタリアンを、リバタリアンを認めないと考えられる。その後の決定論に対する自由意志論との説明と、19世紀のアナキスト(本編では明示されていないがジョゼフ・デジャックらのこと)の婉曲語と紹介している点、1940年代以後にアメリカ

で反ニューディール的な性格を帯びて復活した点は我が協会が常々唱道している通りである。リバタリアン思想史にとって興味深い点は、ロスバードが新左翼に接近したこと、そして、ウィリアム・バックレーが保守主義者を結集させたことだろう。ロスバードは反国家主義的考慮から、右傾化していた——バックレーの影響力が高まっていた——共和党から離れ、民主党左派や新左翼と接近したのだ。新左翼との提携解消後も、ロスバードは保守主義者の大資本家鼻根な点と国家主義的な点を指摘している(ロスバード2016: 338)。「ロックフェラーや他の好ましい多数の大実業家をリバタリアンや自由放任主義の見方にさえ転向させることを期待するのは、無駄で無意味な望みである(ロスバード2016: 338)。」なお、後にロスバードはバックレーらとは異なる保守勢力であるパレオ・コンサバティヴと同盟を結成するに至っている。アメリカのリバタリアンが半世紀をかけて右傾化した事実を見逃してはならないが、紙面の都合上、本稿では一旦区切ることとする。

次に、リバタリアンと組織の話題だが、ロスバードとヘスの努力によって、新左翼団体であるSDS(民主社会のための学生運動)と右派系団体のYAF(自由のための青年アメリカ人)がリバタリアンを介して緩やかな協力関係に入ったことが述べられている。両団体の会議後、アメリカ中でリバタリアンの集団がつくられ、(非議会政治的な)20世紀のリバタリアン運動は最大限の盛り上がりを見せる。

リバタリアン党の設立と議会主義的政治運動の話題の後に、一往復のやり取りだがリバタリアン運動にとって重要な話題として、リバタリアンが(彼の提唱するアゴリズムに基づいた)地下経済活動を志向すべきだということと、公的な議論が存続可能なのは国家に目を付けられない間だけということだ。リバタリアン社会(アゴリスト社会)へ至る過程に、国家との衝突は避けられず、当然にリバタリアン・アゴリストは監視・干渉対象となる。その際に、コンキンは経済基盤と議論の場を国家の目の届かないところに置こうと示唆している。これは私的な意見であり、アゴリズムに対する懸念だが、アゴリズムは国家の暴力に対してどのように対応するのか。コンキンは『新リバタリアン宣言』にて、アゴリスト社会への移行論を説いているが、その要旨はカウンター・エコノミクスによって、つまり国家を回避する経済活動によって国家を財政的に破滅させることだ。しかし、この一連の移行期に、国家が呑気にその死滅を待ち続けるはずがない。国家はアゴリストを弾圧する。その際、アゴリストは国家の暴力に対してどのように対応するのか。経済活動の活発化によって兵器・兵士のアドバンテージを得るのだろうか?ともかく、国家への対抗は、歴史的にも(国家主義者の)利害的にも国家との暴力的対峙であることは明瞭だから、避けられない問題である。

次はコンキンがリバタリアンになった経緯だが、これは案外想定内の範疇なので省略する。

最後に、ロン・ポールについての議論だが、興味深いのは、ポールが孤立しすぎている件についてだろう。議会政治では党派間の妥協は避けられないものである。時には、ドイツ社会民主党のように、社会主義者を弾圧することにすらなりかねない。コンキンの政党政批判はまさにそのような観点に対して強烈な意義があるのだが、そのコンキンをもってして、ポールは孤立し過ぎだと言うのだ。二大政党制のアメリカでは独立した第三政党は無効そのものなので、これでは議会政治戦略の「良さ」もないということなのだろう。

歴史から理論へ

第二の「章」である「歴史から理論へ」では、まず、セントルイス大会とその前後の時代背景の説明から始まる。YAFを牛耳る伝統派にリバタリアン(とその他右派勢力)は追いやられてしまう。その後コンキンは自由リバタリアン党内で急進派として中央集権体制に反発するも、結局、党を去ることになる。

ミルトン・フリードマンとのやり取りはリバタリアン思想史にとつ

て重要なものである。通常、ミルトン・フリードマンは（息子のデイヴィッドほどではないにせよ）多くの人々が「リバタリアンである」と判断する人物である。しかし、コンキンとミルトンのやり取りは、そのようなステレオタイプを一掃させてしまう。なんと、コンキンによれば、ミルトンが第二次大戦の戦費調達のために所得税の源泉徴収に関与したというのだ。もしこれが事実であれば、リバタリアンに対する深刻な裏切りである。ただでさえ、リバタリアンは反戦志向が強い上に、課税を強化するような制度には反対なのだから、戦争協力と源泉徴収を確立するミルトンは立派な国家主義者である。付け加えると、コンキン曰く、シカゴ学派や新古典学派は国家の手先なのだ。

ロスバードの人格の話題では、大方の偏見と異なり、ロスバードは穏健な人物だと評している。そもそもなぜロスバードが粗暴で乱雑な人物だと思われているのか。彼は多くのリバタリアンや周辺思想の運動に関与しており、まず縁がないであろう人々とも交流を試みる人であった。アイン・ランド、チャールズ・コーク、エド・クレーンらのような良くも悪くも一癖ある人々ともひとまず交流を試みるのだが、彼ら/彼女らの強烈な人間性と思想の不一致を前に、破綻に至ったのだろう。また、ロスバードは「相手の言葉」で語る人でもあった。運動論では積極的に左翼活動家から概念と言葉を拝借し、経済・倫理研究では、アカデミズムの人々に対話可能な言葉を採用している。一個人の卓越や金銭的利害を超えた、社会性を伴う説得を重視する人だったと推測することは、おかしいことではないだろう。

ロスバードの運動史は20世紀アメリカのリバタリアン運動史そのものである。ロスバードはまずオールド・ライト的な右翼から始まり、新左翼・アナキストに接近し、アナキストがSDSから追放された後にリバタリアン党に参加し、さらにその後党を抜け、パレオ同盟を構築したのだ。アメリカのリバタリアンのルーツは、19世紀のライサンダー・スプーナーやベンジャミン・タッカーらのリバタリアン社会主義にもあるが、オールド・ライトの存在は無視できない。オールド・ライトの持つ反政府性・反間接民主制・反連邦の権力拡大といった要素は、後のリバタリアンに受け継がれている。上記のような特徴をもって、リバタリアンは（一時的にせよ）新左翼と共闘できたのだ。しかし、新左翼内のパワーバランスの変化とともに共闘関係は解消されてしまう。「リバタリアン」の右傾化・国家主義化はここから始まっていると考えてよい。レーガン政権期になると、ネオリベリズムが思想を席卷する。一部のリバタリアンはネオリベに回収され、さらに（意識的か、無意識的か）ネオリベが「リバタリアン」を自称することで、無政府資本主義・自由市場無政府主義・最小国家主義的リバタリアン思想と運動は崩壊に至る。「ソフト・リバタリアン」の時代の幕開けである。このような時代にあって、ロスバードは自由社会実現のためにパレオ・コンサバティヴと共闘したのである。概括すれば、20世紀アメリカのリバタリアン運動は、リバタリアン自身というよりも、周辺の思想・集団にかなり左右されたことは明らかである。これは、リバタリアン思想が持つ特徴に由来するのか、外的要因があまりにも強すぎたのか、強固なセクトを確立しなかったからなのかは、現段階では判然としないため今後の課題とする。

理論から実践へ

左派リバタリアンの運動はほとんど知られていない。というよりも、左派リバタリアン思想そのものが、残念ながら、リバタリアン境界ですらマイナーである。コンキンの左派リバタリアン運動はそうした状況に示唆を与える。合法期のコンキンの左派リバタリアン運動の特徴として、①ロスバード曰く極左冒険主義・左翼セクト主義であること、②反原子力・反戦、③非合法路線に引き戻す勢力との非和解、④フランスの急進派の影響を受けていること、を挙げている。一見すると、社会主義・共産主義勢力と見間違えよう。左

派リバタリアンは自由市場を擁護するものの、その振る舞いや運動の方向性は左翼そのものである。

左派リバタリアン/アゴリズムと無政府資本主義の違いとして、アゴリズムは企業家を重視し、非国家主義的資本家を中立的な非イノベーターとし、国家主義的資本家を悪とみなす。コンキンによると、無政府資本主義はイノベーター（企業家）と資本家を区別せずに扱うという。アゴリスト社会は資本家と労働者階級が死滅し、人類の独立企業家へ至ると述べているから（Konkin 1983）、資本家に対する理論的期待はないのだろう。さらなる違いとして、現実政治における方針の相違がある。コンキン曰く、無政府資本主義者は既存政党との関係を信じており、敵対勢力と戦うためならば政府と協力することも厭わない一方で、アゴリストは徹底的に非政治的＝非議会政治的だという。

カウンター・エコノミクスについての解説は別の場で行うため割愛するが、カウンター・エコノミクスとインターネットの関係についてだけ意見を述べよう。近年、ダークウェブが盛んだが、これはまさにカウンター・エコノミクスそのものである。国家を回避した経済活動であるダークウェブは瞬く間に新たな市場を切り開いた。ただ、ひとつ懸念があるとすれば、それは国家からの防衛をどのように成すかである。ダークウェブのひとつである「シルクロード」の創設者ロス・ウルブリヒトは米国当局に逮捕され、シルクロードは閉鎖されてしまった。国家との闘いの中で弾圧は避けられないものだが、アゴリスト企業家にとって弾圧は他の活動家と比べ致命的なものになる。というのも、弾圧下の期間は経済活動が停止する挙句、経済活動に必要な資本・商品が没収されてしまうからである。相当上手く国家を回避しなければ、ブラック・マーケット的アゴリスト企業家は成り立たないと言っていいだろう。

以上で簡単ではあるが、「コンキンとのインタビュー」の解説とする。

（前川範行）

参考文献

- Konkin III, Samuel Edward (1983), *New Libertarian Manifesto*, 2nd ed., *Agorism: Revolutionary market anarchism*, URL: <<http://agorism.info/>> (最終取得日2021/10/21、9時40分)。
Rothbard, Murray N. (1978), *For a New Liberty: The Libertarian Manifesto*, 2nd ed., Ludwig von Mises Institute. 岩倉竜也訳(2016)『新しい自由のために』デザインエッグ社。

8/4ウェビナー報告

2023年8月4日20時に、Students for Liberty Japan（以下、SFL）主催のウェビナー、「リバタリアン思想史」が開催された。これは、当協会会長の前川範行がパネリストとしてリバタリアン思想の分類と歴史を語る内容である。本稿は、ウェビナーの経過等を報告する。

まず、SFLの Local Coordinator（日本）の、いとうひかる氏によるSFLの紹介が行われた。次に、本題である「リバタリアン思想史」の発表が前川によって行われた。自己紹介の後に、①リバタリアンとは？②リバタリアンの誕生、③20世紀アメリカのリバタリアン、④リバタリアン間の論争、⑤21世紀のリバタリアン、の章ごとに発表を行い、その後視聴者からの質疑応答を受けた。

①「リバタリアンとは？」では、リバタリアンのおおまかな特徴（例：権威を嫌い自由を好む等）や、その分類（リバタリアン社会主義・左派リバタリアン・右派リバタリアン）、自己所有権を紹介した。発表では明示しなかったが、リバタリアンの3分類はウィダクィストのそれに依拠する(Widerquist 2008)。左派リバタリアンの節では、ヘンリー・ジョージやヒレル・スタイナー学派に加え、自由市

場無政府主義やアゴリズムを左派リバタリアンの一派として取り扱った。通常、学術上の左派リバタリアンはスタイナーらに偏重する傾向があるため、運動（史）ベースのアゴリズムを紹介できた意義は大きい。自己所有権の紹介は、身体所有権と私的・労働所有権の2つに分類して解説した。リバタリアン3派の諸関係を図表にまとめると、図1、表1になる。

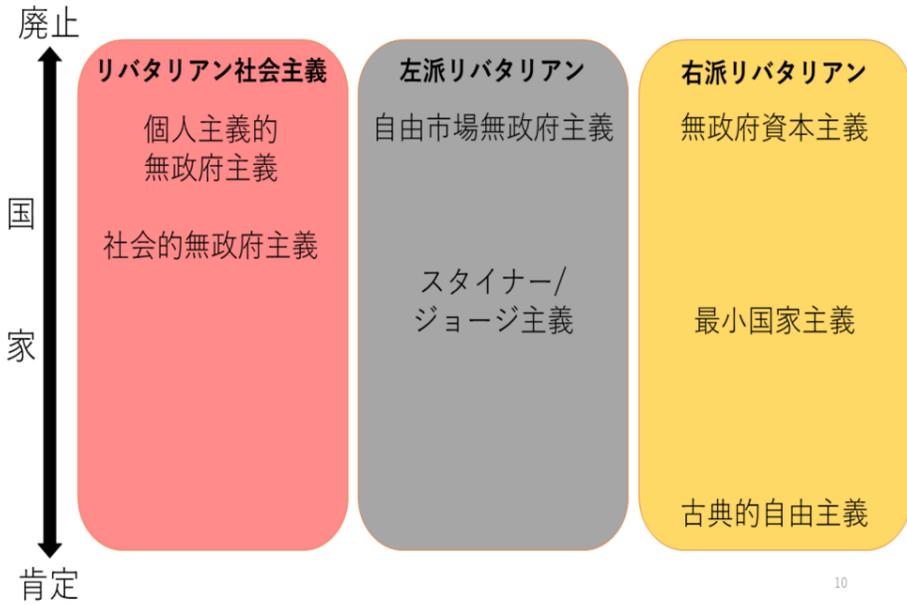


図1

表1

	リバタリアン社会主義	左派リバタリアン	右派リバタリアン
国家	反対	反対or消極的賛成	賛成~反対
資本主義	反対	反対or消極的賛成	賛成
身体所有権	?	賛成	賛成
労働所有権	?	賛成or反対	賛成
主な地域	西欧・南欧	アメリカ?	欧米

②「リバタリアンの誕生」では、主に、リバタリアンの思想史・運動史を取り扱った。本発表では、1858年にジョセフ・デジャックが発表した *le libertaire* をリバタリアンの開始とした。次に、19世紀から20世紀初頭のヨーロッパのリバタリアンの運動であるスペイン内戦を紹介し、その後アメリカのプロト・リバタリアン（ライサンダー・スプーナー、ベンジャミン・タッカー）らの紹介を行った。これらは主にリバタリアン社会主義の思想と運動である。第三に、アメリカのオールド・ライトを紹介した。オールド・ライトそのものはリバタリアンと同定され得ないものの、アメリカのリバタリアンの思想と運動の源泉の1つであるため、紹介するに至った。

③「20世紀アメリカのリバタリアン」では、タイトル通り、20世紀のアメリカのリバタリアンの研究や運動を概説した。1969年、共和党セントルイス大会（後）のリバタリアン追放から解説をはじめ、20世紀アメリカのリバタリアン運動、アカデミアへの進出、知的基盤たるシンクタンクの設立、リバタリアンの政治的衰退を取り扱った。思想の流れを図にすると図2になる。

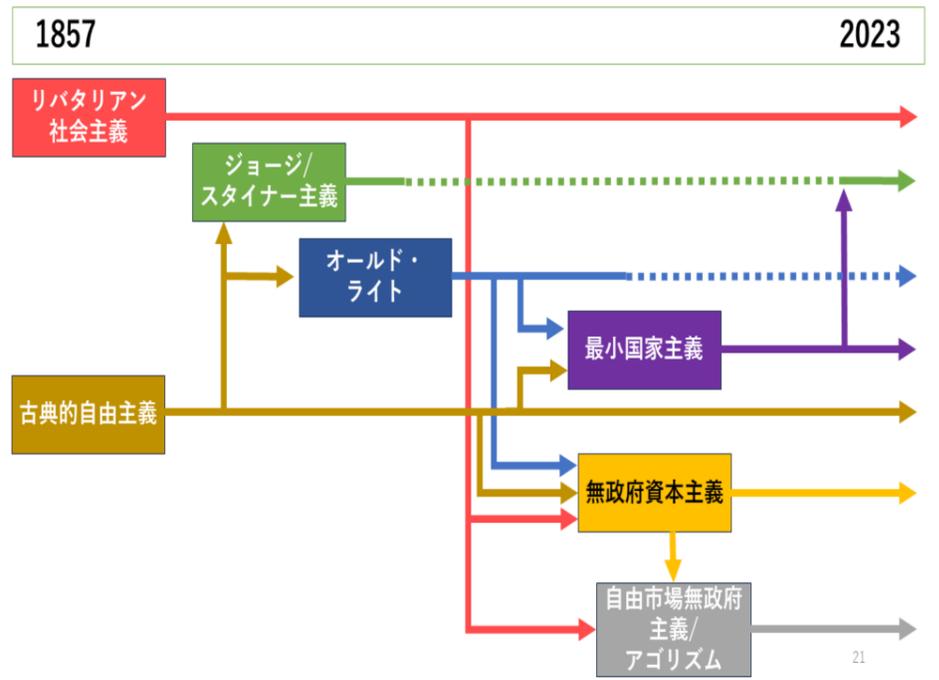


図2

④「リバタリアン間の論争」では、無政府資本主義対最小国家主義、無政府資本主義対自由市場無政府主義、無政府資本主義対リバタリアン社会主義、ハード・リバタリアン対ソフト・リバタリアンの4対立を取り扱った。これら論争が日本で取り扱われることは皆無に近いので、一定の意義があったと言えよう。

⑤「21世紀のリバタリアン」では、簡単ではあるが、ティーパーティー運動とダーク・ウェブを紹介した。

発表後の質疑応答では、「左派リバタリアニズムの運動」と「国家がなくなることによる弊害」の2つの質問が視聴者から寄せられた。前者の質問に対し前川は、左派リバタリアン、特にジョージ/スタイナー主義的運動は稀であると返答した。一方、アゴリズムについては（当事者たちが意識的かどうかはともかく）ダーク・ウェブに通底するものがあるため、人知れず運動が形成されていると言えよう。後者の質問に対しては、①ありとあらゆる主義主張に基づく社会変革は損害を被る・不便を感じる人が発生すること、②その上で（リバタリアン的な）国家廃止は、政治家・官僚・政府と利害のある人たちが弊害を感じるだろうと返答した。当日は返答しなかったが、社会変革中あるいは社会変革後からすぐの期間は、意識的なリバタリアンでさえ多少の不便を感じるかもしれない。これは、やむを得ないものだろう。不便だからと言って何もしないのであれば、リバタリアン思想は不要である。

以上が報告の要旨である。個々具体的というよりも概括的な報告であったため、物足りなさを感じる視聴者がいたかもしれない。そのような考えが芽生えた方は、是非、共にリバタリアン思想を考察して欲しいし、機関紙『リバタリアン』に寄稿していただきたい。

SFLあるいはリバタリアン協会主催で今後もウェビナーを開催する予定です。皆様、是非ご参加いただければ幸いです。

（リバタリアン協会）

訳『新リバタリアン宣言』①

訳者による前書き

『新リバタリアン宣言 *New Libertarian Manifesto*』第二版は、リバタリアン思想家のサミュエル・エドワード・コンキン3世 Samuel Edward Konkin III の主著である。本書は、コンキンの主たる思想である、対抗経済学<1>、ブラック・マーケット、アゴリズムについての著作である。

コンキンは、急進的なリバタリアンであり、その思想、特に理想理論と経済理論はマレー・ロスバードと意見を同じにする。つまり、無政府資本主義的なリバタリアニズムと、オーストリア経済学がコンキンの依拠する思想である。しかし、コンキンはロスバードと異

なる箇所もある。それが、アゴリズムである。リバタリアニズム、そして自由社会をどのように実現するかについて、ロスバードは名著『新しい自由のために *For a New Liberty: The Libertarian Manifesto*』にて、多くの階級、特に中流アメリカ人による「圧力」をその中心に据え、リバタリアン党に加入した。さらに、晩年、自由実現のために自由以外の概念——ロスバードにとって、それは共同体・家族・宗教的価値観に基づく文化基盤だった——を不可欠とした（なお晩年のロスバードはリバタリアン党を脱退している。）一方、コンキンは、撤退的に党派政を批判する。彼にとって、党派は反リバタリアン的な概念であり、一貫性に欠け、説得力を伴わないからだ。また、「コンキンとのインタビュー<https://institute-for-libertarian.org/interview-with-konkin-1/>」にて書かれているように、自由リバタリアン党に加入したコンキンは、党の中央集権制を破壊しようとした。その意味で彼もまた「L」ではあるが、カウンター（対抗）の「L」である。

言い訳がましいが、訳出の上で留保しておく、コンキンは造語癖があり、また、いわゆるアカデミズムの住民ではないため、文章の書き方が「学術英語」ではない。そのため、翻訳は困難を伴った。随時、訳は改良することを事前にお伝えしておく。

原文は、<https://agorism.eu.org/docs/NewLibertarianManifesto.pdf>にて閲覧可能である。

なお、[]はコンキンによる注釈であり、<>は訳者による注釈である。

(前川範行)

コーマン出版、1983

「正しくないけど、書いてみなよ！」と私に言ってくれたクリス・R・テームに捧げる。

以下のすべての人々に感謝する

- ・ルートヴィヒ・フォン・ミーゼス
- ・マレー・N・ロスバード
- ・ロバート・ルフェーブル
- ・そして、彼らの源泉となった人々

第一版は1980年10月にアナルコサミスダット出版によって、第二版は1983年2月にコーマン出版株式会社によって出版された。

印刷：モーニングライズ印刷

目次

序文

I. 国家主義：我々の状況

リバタリアニズム対強制。国家の本性。リバタリアニズムの構築と運動の多様性。国家の逆襲：反諸原理。自由への手段と非手段。裏切りと反応、行動、以上。

II. アゴリズム：我々の目標

目的、手段、目的と手段の一貫性。アゴリスト社会の素描。回復理論：賠償、時間の損失、不安コスト；固有の利点。アゴリズムの定義。異論の反論。

III. 対抗経済：我々の手段

ミクロな活動とマクロな帰結。アゴリスト：対抗経済とリバタリア

ンな良心。「既存」経済の目的。着実な（理論的目的に関する）アゴリズムから国家への退行。ブラックとグレー・マーケット：無意識のアゴラ。「第三」、「第二」、「第一」世界の対抗経済の地位と最も下劣な例。北アメリカでの全商業分野の対抗経済、いくつかは特に対抗経済的。対抗経済の普遍性とその根拠。対抗経済と根拠の限界。インテリゲンチヤと既存メディアの役割。対抗文化の失敗と成功への鍵。国家主義からアゴリズムへの諸段階と、市場保護のリスク。対抗経済の基本的原理。アゴリズムな対抗経済的半社会の見えざる成長の理由。

IV. 革命：我々の戦略

未だ十分に栄えていない自覚的対抗経済、闘争とその支援。戦略なき不十分な闘争性。アゴリズムの成長段階が適切な戦略を決定する。常に適切な戦術。自由を企業する結社としての新リバタリアン連合 [New Libertarian alliance, 以下、NLA]。リバタリアンな信条は新リバタリアンの戦術の制約。段階0：ゼロ密度のアゴリスト社会。良心の芽生え。段階1：低密度のアゴリスト社会。急進派と左派リバタリアン。反諸原理との闘い。国家主義の危機の予想。段階2：中密度、小濃縮のアゴリスト社会。アゴリズム的汚染に抑止された国家の逆襲。NLAが持続的になる見込み。革命情勢の加速。段階3：高密度、高濃度のアゴリスト社会。国家主義の恒久的危機。国家の最後の抵抗：革命。戦略は戦術と対抗インテリジェンスの遅滞を含む。（暴力）革命の正しい定義。段階4：アゴリスト社会と国家主義の不純物。国家の崩壊と、NLAの同時的解決。ホーム！

V. 行為：我々の戦術

いくつかの戦術の列挙。戦術は文脈に応じて発見され、認められなければならない。活動家＝企業家。（当時）我々のものではない場。国家主義左翼の崩壊からの機会。早すぎる党の裏切りからの機会。挑戦のまとめ。新リバタリアンの誓約と活発な最後：アゴラ、アナーキー、アクション！

『新リバタリアン宣言』への称賛

「コンキンの著作は歓迎されるべきだ。なぜなら、我々は運動に関して、より多くの多中心主義を必要とするからだ。なぜなら、彼は、考えなしの独りよがり陥る傾向にある党派政支持者狼狽させるからだ。そして、特に、なぜなら、彼は深く自由について考慮し、リバタリアン運動のスタイルから外れているとされるものを読み書きできるからだ。」

——マレー・N・ロスバード博士

「私はコンキンの『宣言』を見るのが嬉しいし、概して、一貫性、客観性、方法を尊重するその主張に関して、『宣言』を喝采できる…私は、それが「旧左翼」の構成員への強行的な影響力を持っているだろうし、そのような影響力を与えると信じている。」

——ロバート・ルフェーブル

初版への序文

新リバタリアニズムの基本形態は、1973年に設立されたリバタリアン党との私の闘いの中に生じ、また、カウンター・エコノミクスは、まず、1974年の2月にロサンゼルスでの自由企業フォーラムで観衆に提唱した。新リバタリアニズムはリバタリアン運動とそのジャーナルの内外、最も顕著なのは『新リバタリアン誌』で、当時からプロパガンダを行っている。

より重要なこととして、ここでの定められた活動（特に対抗経済）は、1975年以来、著者とその親密な仲間実践されている。いくつかの新リバタリアンの「アナルコ・ヴィレッジ」は形成され、再形成されている。

かつて、あなたは、宣言が伝道される前に実践されているそれを読んだことがあつたらうか？私はそうすることを望んだ。

そして、そうした。

サミュエル・エドワード・コンキン3世、1980年10月。

第二版への序文

アゴリストの出版物は、自由な市場で最も厳格に判断されるべきである。きっと、『新リバタリアン宣言』の初版が売り切れ、そして、企業家のイデオロギーと共に利益を発見する新鮮な企業家の手に取られる第二版が、読者であるあなたともにあるだろう。私の喜ばしい驚きと、市場の判断によれば、NLMが私の出版物のうち最も成功したものだ。

理想の実態において、2年間はかなり短い期間だ。にもかかわらず、NLMへの攻撃は左派・中道のリバタリアンの出版物で発生しており、また、学生ネットワーク新聞のようなものは、最新の月のみ「あの風変りなコンキン」への忠誠の転向のことで、常軌を逸した章についてがみがみ言っている。対抗経済学とアゴリズムのエッセイと記事は、非左派（あるいは非アゴリスト的）リバタリアン出版物でかなり多く見られる。

真に鼓舞する合図は、NLMを取り巻き、配布する南部カリフォルニア地域（そして北アメリカ、またヨーロッパでさえいくらかばら撒かれる）多くの対抗経済的企業家の発生だ。アゴリズム的「産業公園」は第二版が出版されるまでに、オレンジ郡で速やかに凝縮している。

この継続的な満足感、ぼんやりと楽しむものではない。それは、対抗経済（第三章、注釈3を見よ）の書き物であり、理論的大著の計画であり、『資本論』が共産主義者のマニフェストであるように、疑いなくアゴリズムのそれと称されるような、NLMに依拠した理論的ジャーナルの2号に対話を続ける著者に影響を受けている。

私が伝道していることを実践し続け、実践を拡大する限り、私は初版の最後に付け加えるかもしれない。

そして、わたしはいまだにそうしている。

サミュエル・エドワード・コンキン3世、1983年、2月。

国家主義：我々の状況

我々は、仲間である人間に強制される。彼らは強制しないことを選択する能力があるため、我々の状況がそうである必要はない。強制は、人間の生命と達成感に関して、不要で、非効率で、不道徳である。次のような人たちの近隣の人々がそのような人たちに祈るように、怠惰になることを祈る人々は、多く選択する自由がある。この宣言は別の方法を選択する人々のためのものである。抵抗するためだ。

強制と戦うために、それを理解しなければならない。より重要なこととして、対抗することと同じく、取り合うことを理解しなければならない。隠れた反発は、すべての消極的な抵抗の原資の指示に隠れ、機会を分散させる。共通目標の追及は敵対者に注視し、一貫した戦略と戦術の形態を認める。

拡散する強制は、ローカルで直接的な自己防衛に最適に扱われる。市場が保護と回復のための大規模ビジネスを発達させるかもしれないにもかかわらず、暴力に対する手あたり次第の脅威は、犠牲者の考えに深く根差した神秘主義と妄想の根源にただ対処可能で、また、歴史的特異性の大変動点と大戦略、つまり革命を要する。

強制の組織のように、手あたり次第の犯罪による信じがたいスケールの、抵抗の協調、犯罪と殺人の指示、不道徳の集権化が存在する。

それは、暴徒の中の暴徒であり、ギャングの中のギャングであり、陰謀の中の陰謀である。それは、ここ数年<1980年前後>より前の歴史のすべての死者よりも、多くの現代の人々を殺害している。それは、ここ数年より前に作られた富よりも多く富が盗まれている。ここ数年より前のすべての不合理よりも多くの精神が——その生存のために——惑わされている。[それは]我々の敵、国家だ。[2]

20世紀のみで、戦争はすべての以前の死者よりも多くの人を殺した。税とインフレは以前に生み出されたすべての富よりも多くの富が盗まれている。政治的な嘘、プロバガンダ、そして以上すべての「教育」は、すべての優勢な迷信以上の精神を捻じ曲げている。すべての故意の混乱と不透明化にもかかわらず、理性の糸は、国家のための強制執行のロープに編み込まれた抵抗の繊維/性質、つまりリバタリアニズムを発達させている。

国家がその抵抗を分断し、征服する場で、リバタリアニズムは団結し、解放する。国家が曖昧にさせる場で、リバタリアニズムは明瞭にする。国家が隠匿する場で、リバタリアニズムは暴露する。国家が大目にみる場で、リバタリアニズムは責め立てる。

リバタリアニズムはただ一つの単純な前提から広大な哲学を作り上げる。原初の暴力、あるいはその脅威（強制）は悪（不道徳、邪悪、悪い、極度に非実践的等）で、禁止される。それ以外の何者でもない。[3]

この点の発達につれて、リバタリアニズムは問題を発見し、解決を定義する。国家対市場だ。市場はすべての自発的な人間行為の合計である。[4]もし誰かが非強制的に行為したならば、その人は市場の一部である。したがって、まさに、経済学はリバタリアニズムの一部となる。

リバタリアニズムは、非強制に由来する人間の権利を説明する人間の本性を研究する。リバタリアニズムは以下のようなことに追随する。人間（女性、子供、火星等）が生命とその他の財産——それ以外にない——に対する絶対的な権利を有するということだ。したがって、まさに、客観的な哲学はリバタリアニズムの一部となる。

リバタリアニズムは以下のことを問う。なぜ、今、社会はリバタリアンなものではなく、国家、その支配階級、その偽装、そして、真実を示すために戦う英雄的な歴史家を発見したのか。

哲学、特にカウンター・心理学としてトマス・スザス Thomas Szasz <2>につくれられた哲学は、国家の制約と自己束縛の両方からリバタリアン自身を自由にすることを求めるリバタリアンによって擁護される。

国家の潜在的恐怖を表現し、多くの自由の可能性を推定する技芸的形態を追い求めることで、リバタリアニズムは既に現場でSFを発見した。

政治的・経済的・哲学的・心理学的・歴史的・芸術的実体から、自由のパルチザンたちは、全体的で、統合的な、彼らの抵抗とその他の場を見つけ、また彼らが良心に気づくにつれて、彼らは一体になった。したがって、まさに、リバタリアンは運動になったのだ。リバタリアン運動は周囲を見まわし、挑戦すべきことを発見した。それは、海の深み乾燥した前哨基地から月面まで、あらゆる土地、人民、部族、国家そして個人の精神のいたるところに、我々の敵である国家が存在することだ。ある者は、国家の現在の支配者を打倒する権力を持ったエリートに対する他の対抗者と直接の連合を求めた。[5]ある者は、国家の代理人と直接の対立を求めた。[6]ある者は、投票にあまり反抗しないことを求める与党の人々との協調を追及した。[7]そして、ある者は、運動の構築と発展を行う大衆の長期に渡る啓蒙を定着させた。[8]どんな場でも、活動家のリバタリアン連合が生じた。[9]

国家の高級サークルは、彼らの略奪品をもたらさず、反抗の最初の印で彼らの犠牲者へ財産を回復しようとしなさい。最初の対抗攻撃は、腐敗したインテリ・カーストに既に根付いた反原理から生じる。敗北主義、退避主義、最小国家、協調主義<3>、漸進主義、一元主義と改革主義、これらは、国家主義を「向上させる」国家機関の容認

を含む！これらすべての反原理（逸脱、異端、自己破壊的で矛盾した信条等）は、後で扱う。最悪なのは党派政 Partyarchy で、国家主義的手段を通じたリバタリアンの目標を迫及する反概念であり、特に政党が最たるものだ。

「リバタリアン」党は、巢立ちするリバタリアンを飛び立たせない国家の第二のカウンター・アタックであり、まず、バカバカしい自家撞着として[10]、次に、侵略軍としてだ。[11]

第三の対抗攻撃は、主要なリバタリアン組織（党だけではない）を買収し、他の富豪が資本主義国家のすべてのその他の政党を動かすように、運動を動かすアメリカ合衆国の最も裕福な資本家の一人によって企てられた。[12]

このような国家主義の対抗攻撃の成功の程度は、腐敗したリバタリアニズムにおいては、「左翼」の運動の断裂と、他の運動の無効化の絶望にたどり着いている。「リバタリアニズム」に芽生える幻滅のように、幻滅はこの新しい問題に答えようとする。国家の外と同じく、国家の中の問題に対してだ。我々はどのようにして、国家とその権力エリートに使役されることを避けるだろうか？つまり、彼らは以下のように問う、我々が自由の経路以上のものがあるとき、我々は自由の経路からの逸脱を避けることができるだろうか？市場は多くの製品への経路と製品の消費を持ち合わせ、完全に予測できない。ここ（国家主義）からそこ（自由）へと至る方法を誰かが教えてくれたときでさえ、我々はその最良の方法をどのように知るだろうか？

既にある者は、他の目標とずっと前に死んだ運動の古い戦略を蒸し返している。新しい経路は実際に求められている。国家への回帰だ。[13]

不意であれ、計画的であれ、裏切りは続く。その必要はない。

誰も、自由意志に基づく個人のための自由社会に的確に到達する一連の段階を予想できない一方で、自由を進歩させないものすべてを一撃で排除でき、また、市場の原理の適用は、確固として、旅の領域を緻密に計画する。ひとつの一直線の自由への見取り図であるような、一方的なものはない、もちろん。しかし、自由社会へのリバタリアンの目標へリバタリアンを誘うような、線で埋め尽くされた空間である、見取り図群はあり、その空間は著述可能である。

一度目標が修正され、経路が発見されると、ここからそこへ行く個人の行為のみが残される。以上すべてから、この宣言はそのような行為を求める。[14]

脚注

[1]私はこの洞察のために、異なる結論を描くにも関わらず、ロバート・ルフェーブルに恩義を感じている。

[2]ありがとう、アルバート・J・ノック、あのフレーズを。

[3]現代のリバタリアニズムは、絶えず1年、あるいはそれ以上の日を、いかに最近のエディションにもかかわらず、『新しい自由のために』のマレー・ロスバードに最もよく説明される。おすすめのリバタリアニズムの最良の著作は、音楽の全ジャンルの中からおすすめのただ一つの歌を説明するようなものだ。

[4]ありがとう、ルートヴィヒ・フォン・ミーゼス。

[5]急進リバタリアン同盟、1968-71。

[6]1968-72の学生リバタリアン行動運動は、後に、プロトMLLとして蘇った。

[7]1972年に、共和国再建市民 Citizens for Restructured Republic は、革命に幻滅したRLA構成員によって作られた。

[8]個人的自由協会は1969年から存続。ランパート大学（現在消滅）、経済教育財団、自由企業研究所、これらすべては1969年のリバタリアン人口拡大期より前から存在している。

[9]最も重要なこととして、1969-73年のカリフォルニア・リバタリアン同盟。その名はいまだに、会議のスポンサーと、イギリスで生き続けている。

[10]第一の「リバタリアン」党は、1970年にカリフォルニアでガブ

リエル・アギュラーとエド・バルターによって設立された。メディアへのアクセスを得るための中身の無い貝殻としてだ。（ガランボス主義者のアギュラーは断固とした反政治的な人だ。）ノーランの「リバタリアン」党[4]でさえ、その設立1年目はマレー・ロスバードに無視され、軽蔑された。

[11]

結果的に全米的に組織され、1972年に大統領・副大統領選挙でジョン・ホスパースとトニー・ネイサンを擁立した「リバタリアン」党は、コロラドで1971年12月にデイヴィッドとスーザン・ノーランにまず組織された。デイヴィッド・ノーランはマサチューセッツのYAFの構成員で、1967年にYAFと決別し、セントルイスでの1969年のクライマックス[5]を逃した。彼はこの本の初版[1980年]まで保守主義者かつ最小国家主義者であり続けた。

ノーランたちはむしろ潔白であったにもかかわらず、また、他の早期の組織と候補者がしばしばそうであったように、「党の質問」討論がすぐに始まった。新リバタリアン・ノートは1972年の春にリバタリアン党の概念を攻撃し、まさに選挙前にノーランとコンキン間の討論を始めた(NLM第15号)。

1980年の大統領選挙で、ノーランたちはエド・クレーンと彼の候補者であるエド・クラークたちのリバタリアン党の指導者と決別した。クレーンとクラークらは、高度の権力を持ち、多くの財産を持ち、伝統的な票集めと綱領の装飾運動を行った。

[12]

[カンザス州]ウィチタの石油王のチャールズ・G・コークは、彼の親族、財団、研究機関を通じて、1976年から1979年の間、次の組織を、買収、設立、あるいは「買い占めた。」マレー・ロスバードと彼の『リバタリアン・フォーラム』、ロイ・A・チャイルズ編集の（ロバート・ケファート設立の）『リバタリアン・レビュー』、ミルトン・ミュラーによって運営されたリバタリアン社会のための学生運動 Students for a Libertarian Society (SLS)、リバタリアン研究センター（ロスバード学派）とジョー・ペダン、ウィリアムソン・エヴァース編集の『探求』、ケイトー研究所、そして様々なコーク基金・財団・研究所。『新リバタリアン』第1号（1978年2月）で「コクトパス Kochtopus」と名づけ、それはまず保守的リバタリアンの『理性』誌のエディス・エフロンの出版物に、「アナキスト的」陰謀の申し立てに沿って、攻撃された。左派リバタリアンの運動は、エフロンの反アナキスト的戯言から逃げ出し、運動の一元主義の成長の彼女の重要な暴露に対する彼女への支援を急いで行った。

1979年、コクトパスはロサンゼルス大会で、全国リバタリアン党を統制下に置いた。チャールズの兄弟である、デイヴィッド・コークは、明け透けに50万ドルでVP[副党首]を買収した。

[13]

マレー・ロスバードは79年のリバタリアン党の大会後すぐにコクトパスと手を切り、彼の親密な仲間たちのほとんどが『探求』のウィリアムソン・エヴァースによって追放された。CLS[リバタリアン研究センター]は、コークの財政的支援から打ち切られた。『リバタリアン・フォーラム』はコークを攻撃し始めた。ロスバードと若いジャスティン・レイモンド Justin Raimond は、リバタリアン党の新しい「急進派」を設立した（1972年から1974年の最初のもの、戦術の採用としてのNLAの創始者によって運営され、また内部からの党の破壊の為に運営された。）

ロスバードは、1980年7月のオレンジ郡の急進派のディナーのスピーチで、「コンキンは正しいのか？」と尋ねたにもかかわらず、急進派の戦略は新左翼と新マルクス主義者の戦術を用いたリバタリアン党の改革であった。

[14]

次のエディションはこの註が除かれていると私は願うが、現在の歴史的な文脈において、リバタリアニズムは、すなわち、もしかすると若者・白人・よく参照されるコンピューター・コンサルタント・同じくフェミニストの仲間（そして1/2の子供たち）に典型化された

北アメリカの最も「進歩し」、啓蒙された要素のためのものではないと指摘することが不可欠だ。

最も自由な市場のみが、苛酷な貧困と自己破壊的な迷信から「第二」、「第三世界」を起こすことができる。製品の基準に批判的に提起され、文化理解に関連した強制的試みは、反発と復元の原因となる。例えば、イランやアフガニスタンだ。ほとんどの場合、国家は自己向上の恣意的抑止に努める。

香港、シンガポール、(以前の)上海の自由港のような、上昇志向の強い人々が殺到する、疑似自由市場は強く企業家を動機づける。信じられないほど高く発展したビルマ[ミャンマー]のブラック・マーケットは、既に、全経済を動かし、ほぼ一夜にして貧困を絶滅させるための貿易の加速と、ネ・ウィン Ne Win <6>と軍を追放するリバタリアンの自覚だけを必要とする。

類似の観測は、発達したブラック・マーケットと、アルメニア・ジョージア・そしてロシアの対抗経済のような、ソビエト占領下の「第二世界」の寛容な半自由市場についても可能である。

[15]

第二版の注。上記の注釈はいまだに、悲しいことに、必要とされる。

訳注

<1>Counter-Economics は、後に本文でコンキンに説明されている通り、経済そのものに対抗するのではなく、あくまでエスタブリッシュメントの経済に対する経済である。なお、訳語に関しては、造語の元になったカウンター・カルチャーが対抗文化と訳されることもあるため、対抗経済(学)とした。

<2>Thomas Szasz (1920-2012)は、アメリカの学者、精神科医。

<3>一般に、collaborationism は、敵対勢力への協力という意味合いがある。ヴィシー・フランスがナチス・ドイツに対して行ったコラボレーションが有名。

<4>原文は「L」P」。政党を伴う文脈の場合、リバタリアンの表記は大文字のLになる。

<5>1969年共和党セントルイス大会のこと。無政府資本主義的なリバタリアンが共和党から追放された大会であり、この大会を機に、20世紀アメリカの(リバタリアン社会主義を除く)リバタリアン運動が始まった。

<6>Ne Win (1910-2002)は、ビルマの独立運動を指導したビルマ社会主義計画党の議長。

熊野寮への不当な家宅捜索に抗議する

私はリバタリアンとして、熊野寮自治への介入を避けない警察・機動隊・国家権力の強制捜査に対して原則的に抗議する。あわせて、読者諸氏に対して、自治に対する警察・機動隊・国家権力の介入を拒否しそれに対する抗議の意を表明することを呼びかける。まずは経緯からである。

2023年7月26日、京都大学熊野寮自治会は、Twitter (@kumanoryo) 及び熊野寮HP上において、同年4月30日に京都府警により行われた熊野寮への家宅捜索の現場において、「悪質」とされる取材活動を行っ

た京都新聞社に対する抗議声明文を、同年6月25日に京都新聞社に対して提出し、抗議を行った旨を公表した。同声明文内で触れられているように、本件家宅捜索は、押収された「証拠」の証拠能力が極めて疑わしいものであったこと、日曜日の昼間に不必要に数百人の機動隊を動員して寮生の平穏な生活を侵害したこと、逮捕された寮生が結果的に無罪放免で釈放されたことなど、逮捕から家宅捜索、釈放に至るまでの一連のプロセスのどの部分を取り出しても極めて不適当なものであった。

まず、当声明文中でも述べられているように、「日曜日の昼間に数百人の機動隊を動員して行う京都府警の不必要な家宅捜索は、市民から集めた税金の使途として明らかに不適切で」ある。このような明らかに恣意的な税金の行使は、リバタリアンとして断じて認められるものではない。

加えて、繰り返される警察・機動隊・国家権力による熊野寮への家宅捜索は、強固な自治を実践する熊野寮に対する妨害行為に他ならない。百歩譲って、警察・機動隊・国家権力による熊野寮への家宅捜索に、強固な熊野寮自治に対する妨害・破壊の意図が無いと表明されるとしても、それは現実的には文字通り自治空間に対する権力的な介入に他ならない。その上で、そのような意図がないと表明されたことは一度たりとも無いことから、警察・機動隊・国家権力による熊野寮への介入は、意識的に行われていると考えるのが妥当である。意識的な国家権力による自治解体への傾向に対しては、ただ自治に基づく国家権力への防衛と反撃あるのみである。

また、警察・機動隊・国家権力による熊野寮への権力的介入は通例、国家権力によって「極左暴力集団」と規定されている革命的左翼党派に対する微罪を口実として行われる。今回の家宅捜索も、その例に漏れない。私はリバタリアンとして、共産主義を標榜する党派とは思想的に相容れないが、警察・機動隊・国家権力による革命的左翼党派に対する強制捜査が、熊野寮自治に対する権力的介入を伴うものである以上は、原則としてこれに反対するものである。

(文責：S.K.)

リバタリアン協会からのお知らせ



←協会ホームページのQRコードです。「機関紙」より、過去の機関紙のバックナンバーが閲覧できます。

協会X(旧ツイッター)です。 → フォローとRTをお願いします。



推薦ウェブサイト

Agorism: Revolutionary market anarchism | agorism.eu.org

このサイトは、コンキンの著作が閲覧可能である。

アゴリズム(リバタリアニズムの戦略理論)に関する著作が中心を占めるため、非アゴリストのリバタリアンは関心を持たないかもしれないが、「コンキンとのインタビュー」等、リバタリアン思想史にとって、そして当然、全リバタリアンにとって重要な著作も存在する。コンキンの思想はリバタリアン(特に法哲学系リバタリアン)にとって独特かつ、非ネイティブには分かりづらい文体であるため、初学者は困難に苛まれるかもしれないが、是非挑戦してみしてほしい。